

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990100257		
法人名	株式会社すみれ		
事業所名	グループホームすみれ大寛の苑		
所在地	栃木県宇都宮市大寛2-4-1		
自己評価作成日	令和 3年12月 31日	評価結果市町村受理日	令和4年2月16日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和4年1月13日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の方は、様々な事情でグループホームに住み替えになるがこれまで家族を愛し、愛されそして家族や地域の役に立って、助け合い生活していた時のように、社会の中で一人の人として生活しているという実感を感じて生活して頂けるように支援をしております。これまでは、地域へ利用者と共に向くことをモットーに地域の行事に参加することにより地域の利用者も職員も一員として認めて頂いております。利用者や家族・地域の方々、医療機関の方そして職員との絆を大切に、利用者の願いや家族の想いに応じて「最期まで生ききって良かった」「すみれで最期を迎えられて良かった」と想って暮らしていただけることを目指して職員と一丸となり前に進んで行く支援をしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人で複数の事業所を運営し、研修計画を共有して作成するなど、多形態の事業所の取り組みを計画に取り入れるなどしている。2階、3階がグループホーム、1階が交流フロアとなっている。コロナ禍により、交流フロアを利用した地域との交流が難しくなりましたが、感染対策のとれる近所への散歩など、地域の交流が保てるよう工夫している。また、コロナ禍により、WiFi環境の整備やタブレットの導入により、写真や動画を利用した利用者、家族とのコミュニケーションを図るなど新たな取り組みも始めている。終末期に向けた対応として、入居時から説明を行い、本人、家族の意向を踏まえ取組み、医療機関との連携のもと看取りを行うなど、事業所全体で取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の基本理念はあるが事業所としての理念を「コミュニケーションを図り、自立支援に努める」を各ユニットに職員が振り返りができる場所に掲げ共有・実践できるよう心がけている。	前回の外部評価後、法人理念の他に、事業所ごとの理念を全職員で作成した。朝、夕の申し送りの際に職員が見える位置に掲示し、職員間で共有し、利用者の思いを汲み取れるよう取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	利用者と地域の行事に参加したり、利用者が地域の一員として孤立せず生活ができるよう援助をしていた。現在は、コロナ禍のため行事への参加は行っていないが信頼関係は継続している。	地域出身の利用者も多く、地域の協力も得られやすい環境にあり、コロナ禍前は地域の行事に積極的に参加をしていた。コロナ禍後は地域の協力的なお寺の境内に散歩に行くなど工夫をしながら継続をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の小学校で認知症サポーター養成講座を開催しておりまた、地域の住民や企業などにも認知症サポーター養成講座を開催しており講座の中で認知症の人の理解を深め、対応の仕方の研修を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の感染予防により、定期的に書面にて日常の状況を報告し、開催時には日常の生活状況をパワーポイントを活用して職員の意見も取り入れ報告し、評価や要望を頂きサービス向上に繋げている。	会議は専門職も含む地域の多様なメンバーで構成されている。コロナ禍により書面開催が多くなったが、開催時には動画を用いるなど報告方法を工夫し、活発な意見をいただいている。会議内容については毎回職員に報告しサービス向上につなげられている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、地域包括支援センターの職員の出席を得て、事業所の実情やサービスの取り組みを報告している。運営上の疑問点などはその都度市へ確認し解決している。	研修の講師を依頼されるなど、お互いに困ったことを助け合ったり、実情や取り組み等について報告、相談できる関係にある。また、地域包括支援センターとは運営推進会議を通じて連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての研修を行い、その後研修の感想や意見を自分の言葉でレポートにまとめることで知識の定着・理解を深め、周知徹底に役立っている。身体拘束のゼロに取り組んでいる。身体拘束は行っていない。	マニュアルの他、法人全体で取り組む研修計画により、内部講師が研修を行っている。出席できない職員へはユニットごとに研修委員が報告を行い、レポートを提出させ職員自身の気づきや意見も管理者に伝わるような工夫をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての研修を行い、毎月チェックリストを用いて集計をして職員へ回覧している。チェックリストには、自分以外の職員についても項目があり事業所内の潜在的虐待の発見に役立っている。		

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度は、研修は行われてはいないが運営推進委員に成年後見人制度に精通している司法書士や地域包括支援センターの社会福祉士の方々がおり連携を取り制度を活用できる体制にある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約、解約、改定等には、面談の上利用者、家族の権利や義務を分かりやすく説明し質問に応じ、理解、納得して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見や要望を管理者や職員が伺った場合でも、タブレットに記録し申し送りができ、職員全員が確認したい際にいつでも見ることができるようにして共有・相談して、運営に反映している。	地域のシンボリックなホテルで、お花見会などを通して、利用者、家族、運営推進委員が集まり意見交換する場を設けるなど、運営に反映させてきた。コロナ禍ではIT化を進め、インターネット電話などを利用して家族と会話をしたりするなど、関係継続に努めている。	コロナ禍により、これまで行っていた、家族、運営推進委員との交流行事も行えなくなり、インターネット電話により補ってはいるが、家族との希薄化が危惧される。さらなる取組みの強化に期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が日常的に発言しやすい環境にあり、朝夕の申し送りや日常的に状況に応じて意見や提案を受けている。見える化を前提に意見や提案を受け運営に反映させている。	職員の意見を上げやすい雰囲気づくりに努めているが、職員虐待の芽チェックリストを毎月作成することにより、管理者へ意見が届くようになっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の事情に応じた勤務ができるよう配慮している。職員一人ひとりが個々の能力を発揮し働くことができるよう努めている。今年度より自己評価制度をとり入れている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修は外部講師や法人内の職員による、法人全体や事業所内での研修を行っている。職員一人ひとりのスキルに合わせてOFJTやOJTの研修を取り入れている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日本認知症グループホームや栃木県高齢者グループホーム協会等に加入している。同業者とは、情報を深め情報や意見交換を行い、サービス向上に努めている。		

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族からの情報を得て、本人との触れ合いを大切に、コミュニケーションの中で安心して過ごして頂けるような声掛けや環境づくりを行っている。本人の希望を一番に考え可能なサポートの仕方を職員間で話し合いを行い共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の意見を伺い寄り添いながら不安要素に対して利用可能なサービスの提案を行う。家族の想いを受け止め本人のケアに役立てることができるよう耳を傾けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス導入以前の本人の環境などの話から必要な支援を見極め家族と相談しながら柔軟に対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一方的に職員が何かをする、入居者が何かをするのではなく、職員と入居者で共に日常生活のできる事を行うことで家庭的な雰囲気での安心できる生活を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日常の中での些細な事でも家族と共有し、家族の疑問や不安に寄り添い話をしている。普段の会話の中でも心境の変化を汲み取り、話し合いながら本人のケアに反映させている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	訪問美容や訪問診療の希望がある場合は、いつでもサービスの利用ができるが、病院への受診・美容室への外出・自宅への外出、家族や友人・知人の面会など希望に応じて対応している。	コロナ禍により面会を断わるケースや近所のシンボリックなホテルでの年3回の行事もできなくなってしまった。インターネット電話を利用した馴染みの人との面会や近所の馴染みの場所に行けるよう努められている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士が共に楽しく生活ができるよう、普段の入居者同士のかかわり方をよく理解し、時には職員同士が介入し、声掛けや安心する環境作りを行い、孤立することがないように努めている。		

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後であっても、いつでも相談に応じることを伝えており、必要時の相談や支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族の意見などから決めつけたケアをするのではなく、その時本人が想うことを第一優先とし、本人とのコミュニケーションや様子から把握しようと努めている。	日常のコミュニケーションの中で本人の思いを記録し、反映させるようにしている。また、ケアプランの作成時には家族に来所してもらい家族からの情報を取り入れている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	現時点までの生活歴や病歴・ライフワークなどの理解のため全職員がアセスメントシートに目を通し、不明な点は都度本人や家族に確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	数値や目に見える身体の変化の他に、日常の中のほんの少しの変化でも申し送りや相談することで現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネジャーが両ユニットともケアプランの作成を行っているが、職員からの情報だけではなく本人・家族や医療関係からの意見をとり入れ、本人の状態に応じて作成している。	毎朝の申し送りで職員間でコミュニケーションをとり情報共有をするとともに、往診の医療情報を反映させたモニタリングを毎月実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録には、「何をしたか」だけでなく会話の内容やどのような状態かを記して、後から見返した時にも分かりやすくしている。タブレットからいつでも見ることができ、見返して職員間で相談したり、介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所で提供している既存のサービスの他にも、希望がある際には必要に応じて本人と家族と話し合いながら提案・提供を行っている。		

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターとは日頃より情報交換など協働しており、コロナ禍ではあるがこれまで支えてくれた民生委員や自治会長との交流は行っている。傾聴ボランティアの受け入れを行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人及び家族の希望される医療機関を主治医としている。主治医には、常に状態報告をし必要に応じて適切な医療機関を受診できるようにしている。受診には、日々の状態を情報提供している。	コロナ禍により往診に切り替え、4か所の医療機関が往診に来ている、その中で自由に選んで受診できる体制をとっている。受診の都度、状態が変わったり、投薬も変わることがあるので、家族が知らないことのないよう必ず報告をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の健康管理については介護職と事業所内の看護職の連携に努め、看護職員が必要な助言を行っている。利用者が必要に応じて適切な受診ができるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した場合は、家族と相談しながら地域連携室などと電話や医療連携シートで情報交換を行い、長期入院によるリロケーションダメージを防ぐためにも治療後は速やかに退院できるよう病院関係者と情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りについての説明や意向については入居時に行い、事業所としてできる事できない事を説明している。本人の状態に応じて家族・主治医を交えてのムンテラを繰り返し行っている。	入居時から看取りを希望される家族が多い。看取り指針を設け、研修計画に従い職員研修を行っている。終末期になると、主治医から話を聞き、サービス担当者会議で話し合いを持ち、本人、家族の希望に沿った支援を行うとともに、褥瘡のできない看取りを心がけるなど事業所全体で取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変時や事故に備えて個々の情報が記載されている、緊急ファイルを備えている。緊急時に対応ができるようシュミレーションを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の消防訓練を実施し、通報設備などを使用して訓練を実施している。運営推進委員の中に地元の消防団員の方がおり意見を取り入れたり、協力の体制は築けている。	年2回の消防訓練のほか、運営推進委員に消防団員に入ってもらい研修を行うなど、地域との協力関係を築いている。市内で水害が発生した際も、消防団員の見守り支援を受けるなどした。	

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	事業所内の研修では、入職時等で接遇や個人情報保護についての研修を行い学ぶ機会を設けている。日々の口頭での申し送り時やタブレットでの申し送りでも職員全員が再確認を行っている。	研修計画に従い全職員に研修を行うとともに、虐待の芽チェックリストを利用し、スピーチロックなどをしないなど、気づきや現場の職員で問題の共有を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表現したり、自己決定できるように働きかけている	コミュニケーション技法を活用して本人の想いや願いを引き出すようにしている。言葉での意思表示が難しい場合は、顔の表情などで本人の想いをキャッチし自己決定ができるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおまかな一日のスケジュールはあるものの、利用者の状態やペースに合わせて一日を過ごせるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	当日更衣する洋服は、本人と一緒に選んでいる。日常的に化粧ができる環境を整えている。これまで定期的に床屋に散髪に行かれていた方は、本人の希望にあわせて床屋に行く支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員と一緒に食事の準備や片づけを行っている。コロナ禍で外食が困難な状況であるが、利用者の希望に応じて出前などを楽しんでいる。	調理や配膳をできるだけ利用者と一緒にできるよう取り組んでいる。コロナ禍により外食が困難になったため、利用者が希望するときはスポットで出前をとるなど工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は記録に残し、体重管理や検査データを踏まえて、同じメニューでも個々に対応している。特に食欲減退時は、常食にとらわれず食べたいもの、食べられるものを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを促している。仕上げは必要に応じて行っている。歯ブラシでの磨きが難しい方は、スポンジブラシや口腔ケア用のウェットティッシュを使用して清潔に努めている。		

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンや回数・排泄量をチェックし記録しており、トイレでの自力排泄ができるようトイレ誘導や声掛けを行っている。	利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレ誘導を行っている。リハビリパンツから布パンツになった利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘薬の処方に頼ることなく、乳製品などで自然排便ができるように対応している。便秘薬についても薬剤師と相談し、個々に合わせた処方にもらっている。全身運動や腹部マッサージをとり入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴予定日はあるもの、利用者本人の希望や状態に応じて支援している。入浴のほかには清拭・足浴・手指浴を取り入れている。	入浴の好きな利用者は入浴日でなくても入れるよう対応している。入浴を拒否される方には時間を変えたり、職員を代えるなど、入浴しやすいように取り組んでいる。一番風呂や、熱いお風呂など好みに応じて対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活リズムが違うため、就寝・起床などそれぞれのペースにあわせるようにしている。日中の適度な運動や外気浴をとり入れ夜間の安眠につなげるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	同法人の薬剤師が訪問管理薬剤指導に入っており、医師・薬剤師の指導のもと、管理しており誤薬の防止に取り組んでいる。体調の変化にも対応してもらい密に連携をとっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の生活歴や職歴などの情報をもとに日常生活の中で、本人のできる事に注目して役割や生きがいを持ち、実感して頂けるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で今までのように外出が制限されているが、本人の希望に添って気温の良い日には近隣の散歩や屋上でのティータイムや外気浴の支援を行っている。	コロナ禍により大幅に外出が制限される中、戸外の散歩、周囲が見渡せる屋上でのティータイムなどの時間を設けている。ユニット間でおやつのおすそ分けにいたり、交流をしている。近所のお寺の境内を散歩したり、地域の協力を得ながら外出している。	

グループホームすみれ大寛の苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	管理が困難な利用者については事業所で立て替え管理を行っている。入居時に本人が持参されたお金を管理しており、床屋に散髪に行き散髪代の支払いをしている利用者もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍で面会が制限されたことにより、電話やSNS・季節ごとの手紙のやり取りできるように支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は、利用者が不快感を感じないように臭いや汚れに配慮し、利用者の目線や感覚を大切にしている。季節の装飾品を飾り、季節感を感じて頂けるように工夫している。	共用部分は、ワンポイントで季節を感じさせるものを置き、華やかな飾り物等は置かず、落ち着いた空間となっている。居室が2階、3階となるため、外光が入り、明るい空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の関係性や動線を考慮して、テーブルの席を配置している。本人の意向に応じてテーブル席であったりソファであったりと思い思いの過ごし方ができるように工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた家具や装飾品・家族の写真・お位牌などを持参され、居心地よく過ごされるように工夫している。本人が安全に過ごすことができるように動線を考慮して家具やベットを配置している。	居室にはエアコン、吊り棚が備え付けであり、家具、テレビなどを持ち込んでいる。馴染みのものを飾ったり、畳を希望される利用者には、畳敷きにするなど本人や家族の意向を大切にしている。本人が行う清掃を手伝うなどの支援をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者一人ひとりの状況に応じて、職員が声掛けや誘導するなど不安の無いようにしている。必要最小限の家具などを配置し、安全に生活できる場を心掛けている。		